



琉球大学学術リポジトリ

University of the Ryukyus Repository

Title	高等学校家庭科における家族領域の教材開発と実践（第1報）
Author(s)	浅井, 玲子
Citation	琉球大学教育学部紀要(56): 263-269
Issue Date	2000-03
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/1531
Rights	

高等学校家庭科における家族領域の教材開発と実践（第I報）

浅井 玲子*

A Development and Application of the Teaching Materials, "Family Life Learning", for Senior High School Students (I)

Reiko ASAI

Summary

Many senior high school homemaking education teachers in Okinawa use teaching materials "Family and Family Life Learning" as introduction of their lesson plans. Family life learning is the basic knowledge of homemaking education, however, it is difficult to teach. In addition, there are some problems for this. Students have little interest, it is hard to motivate students, students need to tell their privacy, and there are not many proper teaching materials.

In order to solve these problems, I propose some solutions and applications for it.

- 1 Use visual teaching materials to motivate students as effective ways of teaching.
- 2 Change the teaching styles from lecture-center approach to discussion-center approach, that student tell their opinions and KJ methods.
- 3 Reform the teaching styles from general views of family to use "Value Clarification Test" to create their own family views and to recognize differences of others' family views.

In chapter I, applications of methods are discussed.

はじめに

家族についての学習は、実践的・体験的学習を教科の特性とする家庭科において、講義中心の授業に偏りがちであり、生徒の興味関心が薄い分野と言われてきた。さらに「家族関係分野は必要との認識は持たれながらも、他教科との関連における位置づけのあいまいさ、具体性を持った指導の困難さ、生徒のプライバシーへの配慮、実技に要する時間が多いなどの事情により、やや軽く扱われてきたきらいがある。社会的に家族のあり方の問われる現在、この分野の伝統的な項目だてや指導法が今後の課題¹⁾とする指摘は多い。

沖縄県の高等学校家庭科教師全員を対象に1993年度行ったアンケート調査においても、回答者の

7割をこえる教師が「家族と家庭生活」を家庭科の導入として位置付けており、家庭科の土台となると考えているが、指導が難しい分野であると指摘している。

更に、家族は国や社会のあり方や時代によっても変化する。国連は1994年を国際家族年としたが、その原則のひとつに、「家族は、国や社会によって多様な形態や機能がある。家族の形態や機能は社会によって変化する。家族は、個々の好みや、社会の条件によって多様である。ゆえに、国際家族年は多様な家庭のニーズのすべてに応じるものでなければならない²⁾」ことをあげている。このように変化することや個々によって多様な価値観を持つ事が前提である家族を授業で取り上げる場

* 家政教育教室

合、高等学校においては、現状に対する基礎的知識の獲得と共に、自分自身が創造する家族について考えてみる場を設定していくことが必要である。そのプロセスを通して、様々な家族に対する理解や、将来ぶつかる可能性のある問題へ興味、関心を持ち、社会の変化に主体的に対応できる能力が育成されるのではないかと考えた。

そこで「家族」題材6時間（3次）授業を試み検証した。本報では、その授業の実践状況を、第2報においてはその題材の有効性についての検証結果を報告する。

II 研究の方法

前述の課題のもとに3つの授業仮説をたて、6時間の授業の指導案を作成し、4月～5月に県立高等学校普通科において1年生男女160名を対象に実施した。イメージマップテスト、有効度指数の算出、線結び内容分析、創造家族についての文章記述を行い教材の効果について検証した。

なお、授業における基本仮説は次の3つである。

(1) 題材の導入において、生活経験に関わる視聴覚教材を用いることによって、家族の学習に興味を持つであろう。

(2) 自分自身の概念を表出させ、KJ法によってグループや学級全体でまとめていくことによって、より一般化された家族（家庭）機能の把握ができるであろう。

(3) ゲーム化したテストを用いることによって、自己の価値観を明らかにしていく一つの方法を知り、自己の創造していく家族について表現できるであろう。

III 授業内容の検討

1 『家庭一般』の「家族と家庭生活」の内容
今回取り上げた『家庭一般』の「家族と家庭生活」の内容は以下の通りである。

ア 家庭の機能と家族関係

(ア) 家庭の機能

(イ) 家族の役割と人間関係

(ウ) 家族と法律

イ 家族の生活と家庭経営

(ア) 家庭経営の方針

(イ) 生活時間と労力の管理

ウ 生活設計

(ア) 生活時間の意義

(イ) ライフステージと生活設計

エ 高齢者の生活と福祉

(ア) 高齢者の心身の特徴と家庭生活

(イ) 社会福祉とボランティア

2 指導内容の構造化

前に述べた目標を達成するための題材を考えるにあたっては、さらに細かな具体的内容を抽出し、その構造を明らかにしておく必要がある。ここでは、ISM教材構造化法を用いて、関係づけと構造を見る。なお、KEY概念は、目標を達成するための概念と思うものを教科書、参考書、家族に関する文献を参考に抽出した。

1) 「家族と家庭生活」のKEY概念

- 1 基本的欲求充足機能
- 2 経済的機能
- 3 精神安定機能
- 4 生活文化創造機能
- 5 育児教育機能
- 6 病弱者保護機能
- 7 自然経済時代の家族
- 8 農耕経済時代の家族
- 9 戦後の家族
- 10 いろいろな家族
- 11 家族と社会
- 12 家族の人間関係
- 13 日本国憲法
- 14 民法
- 15 結婚
- 16 世帯規模縮小
- 17 家族構成単純化
- 18 女性の職場進出
- 19 家庭機能の社会化
- 20 家族の課題
- 21 家庭経営の方針
- 22 家族の生活時間
- 23 家事労働と職業労働
- 24 自由時間の活用
- 25 短期の生活設計
- 26 長期の生活設計

- 27 生活の課題
- 28 将来の生活構想
- 29 高齢社会
- 30 高齢者の心体
- 31 社会福祉とボランティア
- 32 社会福祉の課題
- 33 創造家族

2) 「家族と家庭生活」のKYE概念の構造化

1) で抽出した概念を、ISM教材構造化法を用いて構造化し、A~Dにグルーピングし、題材作成をした。(図1)

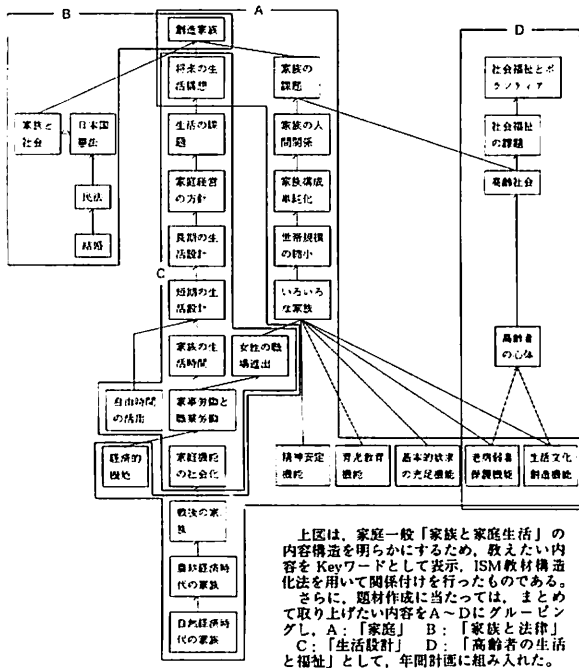


図1 「家族と家庭生活」
指導内容の構造化とグルーピング

ISM-98教材構造化チャート作成システム
(ISM教材構造化分析/Key-Module式教材構造化分析)

IV 授業実践

授業実践・検証はISM構造化図のA「家族(家庭)の機能」にかかわる6時間、第1次~第3次について述べる。

1 第1次

1) 主題名：日本の家族

本時の設定理由

家族について考えるときの問題のひとつは、身近過ぎて、客観的にとらえることが難しいことや、プライバシーにふれ、生徒を傷つけるのではないかと懸念する教師が多く、意見の交換がしにくいという点である。特に、自分が他人にどう見られているかを非常に気にする年代である高校生にとって、定住家族について語るのを好まないことは容易に想像できる。

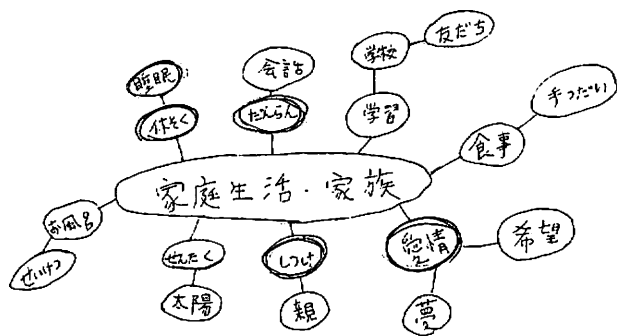
ここでは、VTR「THE JAPANESE FAMILY」³⁾を視聴し、具体的経験に関わる事柄をあえて客観的にみとめるという方法をとった。

「THE JAPANESE FAMILY」は外国人に向けて日本人の家族や家族の生活について紹介したものである。日本語のセリフが字幕で英訳されるという形式で、中年の夫婦の生活や考え方、若い夫婦の生活や考え方、家を購入したためにパートに出る母親、高すぎる日本の教育費等々が取り上げられ紹介されている。このような、生活経験に関わるVTRを視聴することによって、自分の家族と結び付けたり、違いを見つけたりしながら、家族イメージを広げていけるのではないかと考えた。

2) 授業の実践

授業の指導案、実践状況は、第1次授業として示した通りである。

時間	主な学習内容	観覧の流れ	教材教具と留意事項
10	<導入> 1 前週条件 家族について思いっ言葉を発表する。	START → RT → 目標の確認	「理想な家族に対するイメージを発表させ、意識させる。 2~3の発表にとどめる。
45	<展開> 2 家族についてのVTRを視聴する。	VTRの視聴	「家族のイメージをクラス全体でとらえさせる。 ・形全体の日録を確認させる。 【VTR・ワークシート】 「THE JAPANESE FAMILY」の視聴させ、ワークシートに記入させる。 ・実際のナレーションの時は静止画面にし、指導者が解説を加える。 ・イメージマップ・ナストの方法の説明
20	3 イメージマップ・テストをする。	イメージマップテスト → できたか?	【説明表】 ・説明表を行い、IMTが記入できているか確認する。 ・書き方が理解しにくい生徒には個別に指導する。 ・どのような態度に目立っているか、指導表を使って把握し、発言を決める。(状況に応じて)
15	4 IMTの中からKEY概念を選ぶ。	KEY概念の抽出	・5~7の発表を各々抽出させる。 ・抽出した概念はカードに記入させる。
10	<まとめ> 5 本時のまとめと次時予告	まとめ → 次時予告 → END	・抽出したKEY概念を2~3人の生徒に見せさせる。 ・観覧時のイメージとの違いを教25の言葉で補充する。 ・次時はグループでイメージをまとめさせることを知らせる。



VTR視聴後のイメージマップ

2 第2次

1) 主題名 家族(家庭)の機能

本時の設定理由

家族の機能は、夫婦を中心とした生活組織体という点からは、基本的欲求充足機能、経済的機能、精神安定機能、生活文化創造機能等があげられ、さらに親子関係を軸とした家族の発達、種族維持という点からは、育児教育機能、老病弱者保護機能などがあげられる。

これまででは、上述した機能を単に記憶させ、知識として獲得される授業、すなわち講義方式による授業が一般的であった。しかし、知識の習得に重きを置いた実践は、生徒自らが自分の家族について考えるまでには至りにくい。

そこで、これらの機能を、自分の出したイメージを分類して行くという方法の中から、見つけ出してほしいと考えた。

前次で描いたイメージマップより、自分が重要だと感じる言葉を5つ程書きだし、カード化した。そのカードを、4人一組となって「似ている、同じ仲間」の言葉をまとめ、その言葉のグループに、ネーミングをしていく。さらにそれをクラスにひ

ろげ一般化した機能としていく。

グループでの相互交流を、閉鎖的になりがちな家族についての考え方を深めあえる、良い機会になると考え、本時を設定した。

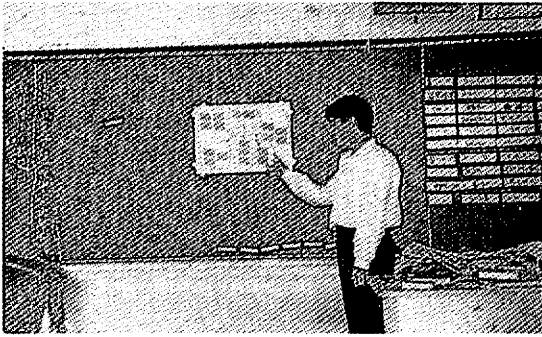
2) 授業の実践

授業の指導案、実践状況は、第2次授業として示した通りである。

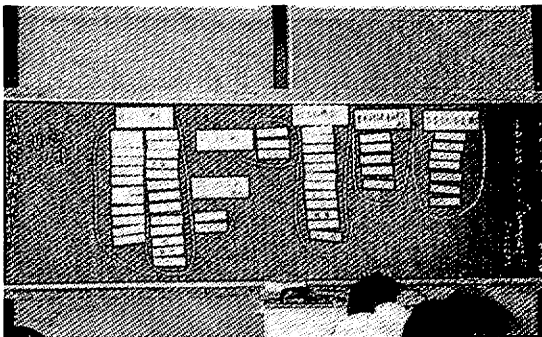
時間	主な学習内容	展開の流れ	教材教具と留意事項
<導入>	1 本時の活用内容を知る。	START 目標の確認	【カード】 「自分のカードをグループで分類する」を説明させる。
5	2 手順書の仕方を知る。	KJ法のやり方	【ワークシート】 「4名グループで話し合い」を行う。
16	<展開>	家庭のイメージの分類	「同じ機能のカードをまとめ、ワークシートに貼り付けさせる。」 「分類する作業がある事を説明させ、4名グループにしたのをお知らせする。」
3	3 同じ様による分類をする	分類できたか NO YES	「巡回支援により、分類の様子を確認する。」 「分類がうまくいかないグループに対しては、まとめる機能をヒントに与える。」
35	4 分類した結果を発表する	話し合い	各グループの総括プリント 「総括が事前に各グループが分類した結果を共有するため、全員に配布する。」 「分類の仕方よりイメージを優先し、発表させる。」 「分類の仕方、役割を中心に発表させる。」
15	5 分類したグループに名前をつける。	グループのネーミング	「分類結果の総括を話し合い、名前をつけさせる。」 「広域から似た言葉で名前をつけるように促す。」
15	<まとめ>	まとめ	「『基本的欲求充足機能』『精神的機能』『精神安定機能』『生活文化創造機能』『育児教育機能』『老病弱者保護機能』の派生から、名前を話し合い付けさせる。」
15	6 本時のまとめと総括	次時予告 END	「家庭の機能について、ネーミングした言葉を使い、総括が一般化を図る。」 「次時は、互いのよさを確認する事をお知らせする。」



イメージマップからカードに書き出したイメージをグループでまとめ、ネーミングをする



グループのまとめを発表する

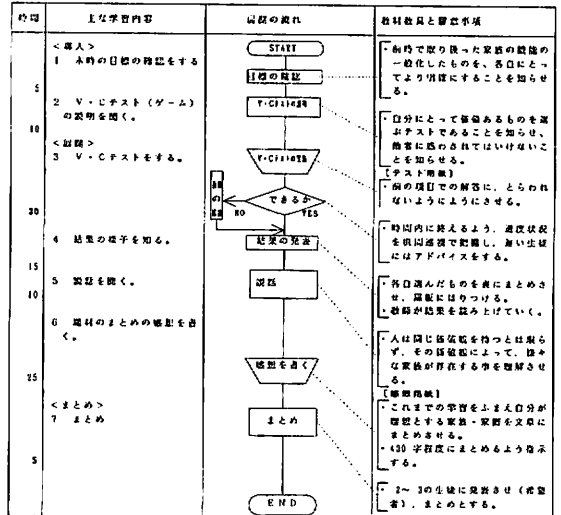


教師による一般化

2) 授業の実践

授業の指導演・実践状況は、第3次授業として示した通りである。

ここで用いたV・Cテストとは、Vとはヴァリュー（価値）、Cとはクラリフィケーション（明確化）の意味で、価値明確化テストであり、坂口順治（立教大学）の作成した教育訓練ゲームの一つである。



3 第3次学習指導演

1) 主題名 創造家族

本時の設定理由

前次でまとめた家族・家庭の機能は、すべてが重要な機能である。しかし、すべてを完全に果たしていくことは難しく、社会化を促進して行かなければならない事も多い。定位家族に住む高校生ではあるが、創造家族の機能に対するシミュレーションをしてみることは、可能である。

ここでは、ゲーム化したテストを用いながら、自分の持つ価値観を明らかにしてみようとするものである。さらに、クラス員の結果をまとめることによって、様々な価値観が存在する事が解り他の家族に対する偏見をなくし、自分自身の定位家族に自信を持てるのではないかと考えた。

自らの価値観を明らかにした後は、その価値観によって、自分はどうのような家族を創造していきたいのか考え、個々人で文章化する事によって、より深化した考えを持つことができるのではないかと考え本時を設定した。

あなたの創造する家族について V・Cテスト

これから、あなたが将来創造する家族についてのV・Cテストをやってみましょう。これは、Vがヴァリューつまり価値であり、Cはクラリフィケーション、つまり明確化という意味です。お互いが持っている価値を明確化することによって、話し合いを深めたり、自分自身をふり返ったり、お互いの違いを認めあう機会にしたいと思います。

ここには、AとBが対になって並んでいます。AとBの機能は、私たちが授業の中で、家族のにとって大切なものとしてまとめてきたものです。

AとBを比較して、あなたが将来創造する家族・家庭にとって、重要である、価値があると思う方に○をつけてください。今まで比較したこともない組み合わせがほとんどでしょう。両方とも重要であると思うかも知れませんが、それでもあえてより大切と感じるものを選んで○をつけてください。

各項目ごとに独立した判断をしてください。前後のことにとらわれたり、前につけた項目にとらわれる必要は全くありません。

大切なことは、あなた自身の判断で選ぶことです。判断しにくいからといってとぼすのは禁物です。

判断しにくい場合は、自分の中で具体的な場面を想像してみると良いでしょう。

1 A 基本的欲求の充足機能 B 経済的機能	9 A 老病弱者保護機能 B 生活文化創造機能
2 A 精神的安定機能 B 生活文化創造機能	10 A 精神的安定機能 B 基本的欲求の充足機能
3 A 育児・教育機能 B 老病弱者保護機能	11 A 老病弱者保護機能 B 精神的安定機能
4 A 経済的機能 B 精神的安定機能	12 A 基本的欲求の充足機能 B 育児・教育機能
5 A 生活文化創造機能 B 育児・教育機能	13 A 経済的機能 B 老病弱者保護機能
6 A 生活文化創造機能 B 経済的機能	14 A 生活文化創造機能 B 基本的欲求の充足機能
7 A 基本的欲求の充足機能 B 老病弱者保護機能	15 A 育児・教育機能 B 経済的機能
8 A 育児・教育機能 B 精神的安定機能	

「集まった人達がゲームを通して、あいまいかもしれないお互いの価値観を強調化して明らかにしようとするのがねらいにある。あえて不明確にしておいてよい部分を、ゲームによって明らかにして、お互いのちがいを知り、そのちがいによってまた新しい連帯感をつくり出すことができるであろう。ゲームであえて強調化してみるところにゲーム性を持ち、各自の価値観を明らかにしていくのである。」⁴⁾

一般的な目的・手順は、以下の通りである。

目的

- ① 各自の価値観を強調化して明らかにするため。
- ② 価値のちがいを明確化して、相互の理解をはかるため。
- ③ 物事の価値について、洞察と交流を深めるため。

手順

- ① 説明 5分
- ② 個人作業(記入) 約7分
- ③ 結果の集計 約5分
- ④ 集計の発表と話し合い 約10分
- ⑤ 全体のふり返り 約5分

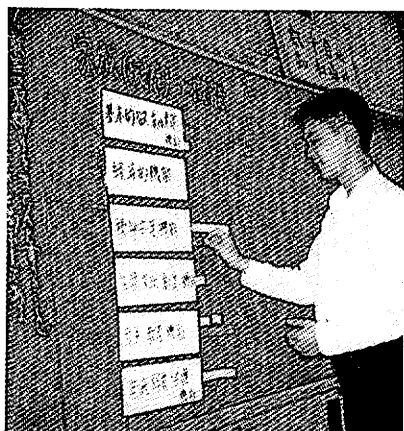
V・Cテスト整理表

	基本的欲求の充足	経済	精神的安定	生活文化創造	育児・教育	老病弱者保護	得点	順位
基本的欲求の充足	1 A	10 B	14 D	12 A	7 A			
経済	1 B		4 A	5 B	15 B	13 A		
精神的安定	10 A	4 B		2 A	3 B	11 B		
生活文化創造	14 A	5 A	2 B		5 A	9 B		
育児・教育	12 B	15 A	8 A	5 B		3 A		
老病弱者保護	7 B	13 B	11 A	9 A	3 B			

なお、<地位、時間、収入、評価、保証、人間関係、仕事>を比較に用いたV・Cテストの他に、結婚相手を選ぶ基準テストとして<容姿、人柄、資産、愛情、将来性、健康、経歴>の項目を用いたテストが紹介されており、項目の変化によって応用できると言う。

そこで、ここでは、「創造家族の機能V・Cテスト」として、<基本的欲求の充足機能、経済的機能、精神的安定機能、生活文化創造機能、育児・教育機能、老病弱者保護機能>の項目を用いて浅井が作成した。

さらに、手順や、方法は、授業にとりいれるにあたっては、授業の目標達成のために、若干の修正、変更を行っている。今回用いた用紙、整理表は第3次の授業資料の通りである。



V・Cテストの結果を自己表示クラスのまとめ

V まとめ

多くの家庭科教師が、「家族と家庭生活」を教科の導入と位置付け家庭科の土台であるが、指導の難しい分野であるにとらえている。また、生徒のプライバシーにふれることや、適切な題材が少ないことが課題とされる家族分野で、問題解決のための仮説をたて

授業実践として

- ① 生徒に興味関心をを持たせる効果的な教材提示の方法として、視聴覚教材の導入
- ② 学習形態の操作による講義中心の授業から、生徒同士の学び合いによる授業への改善として、KJ法の導入とグループでディスカッション
- ③ 上滑りな一般的な家族観から、自己の創造する家族について、各自の価値観の相違を認め合える授業作りとして、V.C テストの導入を図った。

本報告ではその授業の状況を報告した。第2報においては客観的評価に耐えうる検証方法を模索しながら、仮説の検証結果について報告したい。

引用文献

- 1) 加藤・平山・樋口・佐藤・加藤・安藤：日本家庭科教育学会誌29巻1号, 21 (1986)
- 2) 国際家族年の原則と目的, 家庭科学 vol60, NO3, 資料 (1993)
- 3) 『THE JAPANESE FAMILY -THE LIFE STYLE of THE BUSINESSMAN-』, 日鉄ヒューマンデベロプメント企画 (1989)
- 4) 坂口順次：実践・教育訓練ゲーム, 日本生産性本部, 東京(1989)

参考文献

- 1) 佐藤隆博：ISM構造学習法, 明治図書, 東京 (1987)
- 2) 三宅正太郎他教育評価研究プロジェクトチーム：大阪科学教育センター研究収録98号 (1981)
- 3) 教育評価研究プロジェクトチーム：大阪科学教育センター研究収録99号 (1984)
- 4) 坂口順治：実践・訓練ゲーム, 日本生産性本部, 東京 (1989)
- 5) 古藤泰弘・小林一也：授業評価の基本と実際(Ⅱ), 才能教育研究財団・教育工学研究協議会, 東京(1986)